

2018年度卒業式 学長式辞

卒業おめでとうございます。皆さんの在学中における努力と熱意に心から敬意を表すとともに、明日へ向けての皆さんの船出に応援のエールを贈りたいと思います。本日、ここに2018年度卒業式が執り行われることは私たち教職員にとっても大きな喜びであり、心からお祝い申し上げます。

人の人生には何回もの区切りがあります。小学校や中学校、高等学校の入学や卒業は皆さんの経験の中では一つの区切りだったでしょう。もちろん大学への入学はそれまでの思いと違ったものだったでしょう。しかし、大学の卒業はそれまでの区切りとは大きく異なります。皆さんは、小学校から大学までは親の庇護の下で教育を受ける立場でしたが、卒業後はこれまでに修得した知的・身体的財産をもとに周りの人たちや社会に還元する立場になります。したがって、これからは人から何かをしてもらうのではなく「してあげる」側に立つのだと、気持ちを180度切り替える必要があります。

私は、皆さんが卒業後に社会のさまざまな分野で積極的に貢献されることを強く期待しています。社会貢献の仕方としましては、大きく分けて二つあると思います。

一つは、ピーター・ドラッカーがアメリカ社会の大きな特徴として指摘した、自分の余った時間を教会や、ボーイスカウト、ガールスカウトのようなコミュニティサービス機関のために働くボランティア活動です。ドラッカーによれば、アメリカの成人の多くはこのような非営利センターで働くために毎週数時間を費やすにとどまらず、こうした活動を自己充足の機会、家族としての絆を強化するための機会としているそうです。日本社会においても、このようなボランティア活動は近年ますます広がりを見せています。私は皆さんがボランティア活動に積極的に参加されることを望んでいます。

今日、皆さんにお話をするのは、もう一つの社会貢献の仕方、仕事を通じての社会貢献のあり方についてです。私がこのような社会貢献のあり方について深く考えるようになったきっかけは本学卒業生の花房正義さんとの出会いでした。

花房さんは本学経済学部を昭和32年に卒業され、その後日立キャピタルの社長・会長を務められ、多くの人から傑出した金融マン、名経営者と目されてきた皆さんの先輩です。その花房さんは、昨年12月の本学名誉顧問の

会にて、次のようなお話をされました。「現在の世相を一言で言い表すと『今だけ、カネだけ、自分だけ』というものである。このような自分さえ良ければいい、そして長期的視点を欠如させた金銭重視の風潮に流されることなく、東経大は高い倫理観、勇気ある学生を育ててほしい」。私は花房さんのこのような願いにたいして、本学は積極的に答えていかなければならないと強く思いました。

この花房さんの経営論は、「楕円の経営」として有名です。すなわち、優れた経営は楕円形のように二つの中心をもち、「理念」という軸と「財務諸表」の軸という二つの軸のバランスをとることが大切だということです。この考え方は、「理想」と「市場」のバランスをとる経営、または「収益性」と「公益性」のバランスをとる経営と言い換えてもいいでしょう。実際に花房さんは「経営は収益を上げて、その上げた収益を公益に正しく分配していく責任がある」と明確に述べておられます。

私はこの「理想」と「現実」の二つの中心を持つ「楕円形の経営」は会社の経営だけでなく個人の生き方にも当てはまると考えています。皆さんには、「理想」と「現実」の二つの中心を絶えず意識し、その二つの間のバランスを取りながら誠実に生きていってほしいと願っています。

まずは、社会の「現実」になじんで下さい。皆さんを待ち受ける日々の仕事に真剣に向き合い、実績を積み重ねて行って下さい。他人から言われて仕事をする、命令を待って動き出すのではなく、言われる前から率先して仕事に取り組んで下さい。これこそ本学が掲げる「進一層の精神」です。

自ら率先して仕事に取り組めるようになるための最良の方法は、「仕事を好きになる」ことです。どんな仕事であっても、好きになれば、全力で打ち込んでやれるようになります。そしてやり遂げれば大きな達成感と自信が生まれ、また次の目標へ挑戦する意欲が湧いてきます。その繰り返しのなかで、さらに仕事が好きになります。そうすれば、どんな努力も苦にはなくなり、皆さんは「厳しい現実社会」のなかでも十分に生きていけるようになります。

それと私からのもう一つのアドバイスがあります。それは、「仕事を好きになる」だけでなく、「会社や職場との一体感」をもちながら仕事に取り組んでほしいということです。自営業者や会社を創業した人間ならごく自然に仕事や会社と一体感をもつことができますが、他人がつくった会社に就職する人間が会社や職場と一体感をもつのは難しいことです。しかしそれでも私

は、皆さんに組織と一体感をもって仕事に取り組んでほしいと願っています。一体感を持つことができたなら、日々の業務にもおのずと熱がこもり、仕事の上達が早くなるだけでなく、皆さんは周りの人から「大切な仕事仲間」として信頼されるようになります。そのような評価は皆さんに心の余裕と自信を与え、皆さんの「組織の中で生きる力」「社会の中で生きる力」を飛躍的に向上させます。

しかしこのことは、皆さんに「会社人間になる」ことを勧めていることではありません。「会社人間」は、長年会社のなかで過ごしているうちに、「会社が世界のすべて」という錯覚に陥ってしまい、すべての価値観が会社優先になってしまいます。これが悪い方に転がると、いつのまにか倫理観まで麻痺し、極端まで行くと「自分の会社さえ儲かればいい」「会社を守るためには少々の違法行為も許される」などと考えるようになります。これではいけません。

それでは、自分の利益や会社の都合を優先するあまり倫理観まで喪失してしまうような事態を防ぐにはどうすればいいでしょうか。

それには、より広い観点から物事を見る目を養い、自分の行いを一段高い場所から相対化して見るようになってきます。先に述べた、楳円のもう一つを中心である「理想」や自分の中にある「良心」と照らし合わせながら行動を律していくことが大切になってきます。「だれから見ても正しい方法で仕事を行っているだろうか」、「どのようにしたら社会の役に立つだろうか」とつねに問いながら誠実に生きていって下さい。「こういうことをして人の役に立ちたい」という気持ちをもつだけで、仕事はそして人生は何倍も豊かなものになります。

本日、私は本学を巣立つ皆さんに高い理想をもちながら、仕事を通じて、またさまざまなかたちで社会に貢献して下さいと述べました。もちろん、これは皆さんにたいして言っているだけではありません。皆さんを送り出す私たち自身にたいしても言っているのです。私たち教職員もまた高い理想をもって、卒業生の皆さんがいつまでも誇りに思えるような大学へと本学をさらに発展させるために日々努力を重ねてまいりたいと思っています。

最後に、皆さんにこのような約束をすることを以って、私の式辞といたします。

2019年3月23日
東京経済大学学長 岡本英男